

The thunder-bolt has fallen!

『皇国』においてそれは「青天の霹靂」と表現された。廃藩置県が福井にもたらした動揺のことである。グリフィスは自ら目撃した歴史の決定的ひとこまを描写する。武士の家には興奮が渦巻いているとか、役人や教師の顔が青ざめているとか、三岡八郎（由利公正）を殺すと息巻いている連中がいるらしいとか述べて、以下の文章となる。

「たった今とどいた天皇の声明によると、武士の世襲の所得を減らし、名目だけで任務のない役所を廃止し、それに付けた給金は天皇の国庫に渡すよう命じている。役人の数は最小限まで減らす、藩の財産は天皇の政府のものになる、福井藩は中央政府の一県に変わる、そして役人はすべて東京から直接に任命されることになる。」（以下『皇国』からの引用は全て山下英一氏訳）

たしかに廃藩は天皇の命令だが、この詔が出されるのは西暦の 8 月 29 日（当時の和暦では 7 月 14 日）。一方で『皇国』における上記事件の日付は 7 月 18 日。グリフィスは手紙も日記も当然西暦でつけていて、『皇国』もそれに従っているから、別に和暦と取り違えたわけではない。また、廃藩は電光石火のクーデターだったから、一か月以上前に情報が漏れたという話でもない。

実は『皇国』の日付の前日付で、福井藩が独自の藩制改革令を出している。内容は藩士の削禄とか冗官の整理とか、上記引用した『皇国』の言及と重なる。さらに続く記述がそれを裏付ける。

「この変化は私にいい影響を与える。いままで学校の管理に十四人の役人があっていた。船頭多くして舟山に上る。ところが今は、わずか四人。藩庁から役人が訪ねてきて、私の四人の護衛者と八人の門番が免職になると告げた。これからは二人の門番しかいない。」

実際この日付の日記にグリフィスが残した彼周辺の人間の名前は、公刊された福井藩士の履歴により免職の事実が確認できる。日記の中でも「天皇の政府の布告」としているから単に誤認したとともとれるが、グリフィスが細かい事実関係にとらわれず、その事実のもつ意味の核心を書きたい性質の人なのも否定できない。たしかに、藩の布告と 1 か月後の中央からの指令の内容が被った事実自体に、この革命の性質はあらわれている。

明治維新は極端に単純化すれば、以下の段階を踏んで進んだ。

1. 幕府のリストラ (1868)
2. 藩のリストラ (1871)
3. 武士のリストラ (1876)

対外危機の中で元首としての天皇の正統性が急浮上し、幕府との二重権力が出来する。徳川三百年のしがらみを嫌う諸藩は天皇の下での一元化を志向し、御家紋筆頭越前松平家の尊王のプリンスとその家臣たちは、両極に精神を引き裂かれる苦汁をなめつつ、段階1はグリフィスが大学生の間に完了した。

もともと国力の結集がこの革命の眼目だから、天皇の下でも所詮諸藩バラバラでは意味がない。強力な統一国家をつくるため、諸藩を自立した公国から画一的な自治体に改める制度改変がグリフィス卒業の年に断行されたが、殿様が知事で旧臣が部下だから御一新には程遠い。いずれ廃藩という段階2の完全断行も武士たちの意識にはあったけれども、それは西郷・木戸たち閣僚が再び内戦を覚悟してはじめて可能な大勝負であり、明日藩がなくなるとは誰も思っていない国にグリフィスはやってきて、「青天の霹靂」に遭遇したのである。

結果として、この時は内戦にはならなかった。それはグリフィスが福井で体験したとおり、多くの武士が国のために必要なことと認識していたからである。そして、その認識には、段階3という自己の身分の否定も含まれていた。無論、武士あがりの一部高官の専制で断行される以上、渦巻く不満は流血の呼び水となった。しかし多くの武士は失業を受け入れた。先祖が築いた名誉を歴史という蔵に収めて。名誉ある武士であればこそ、国を守るという武士の責務を果たすために、身分を捨てた全日本人の力の結集が必要であるというのなら、それを受け入れざるを得なかった。すでに藩というシステムが「家の名誉」を食べさせていけない事は明白だった。段階3は段階2の完了前に各藩でそれぞれに進行していた。諸藩はむしろ、重い肩の荷を下ろしたのであった。

「昔から日本の最大の災いは働かない役人とごくつぶしが多すぎることであった。まさにシンドバッドが海の老人を振り落したと言える。新生日本万歳！」

『皇国』7月18日条末尾に記されたグリフィスの快哉は、粛々と時勢を受け入れて見えない未来に踏み出していった誇りある武士たちの意識の中でこそ、悲哀と共にとっくに正当化されていた。